

世界システムという社会？ I

世界システムについての さまざまな見方

†:このマークが付してある著作物は、第三者が有する著作物ですので、同著作物の再使用、同著作物の二次的著作物の創作等については、著作権者より直接使用許諾を得る必要があります。

国際社会という言葉？

- International Society?
- International Community?
- World Society?
- World Community?
- Global Society?
- Global Community?
- International/World/Global System?

日の下に新しいものはない

「日の下には新しいものはない。「見よ、これは新しいものだ」と言われるものがあるか、それはわれわれの前にあった世々に、すでにあつたものである。」
(921 伝道の書)

『聖書』(日本聖書協会 1962)

「日の下に新しき者あらざるなり。見よ是は新しき者なりと指して言うべき物あるや 其は我等の前にありし世々に既に久しくありたる者なり」(1146 傳道之書)

『舊新約聖書』(日本聖書協会 1967)

Nothing New Under the Sun

there is nothing new under the sun. Is there a thing of which it is said, “See, this is new”? It has already been, in the ages before us. [Revised Standard Version] (614, Ecclesiastes, I-9,10)

The Holy Bible: New Revised Standard Edition
(Thomas Nelson Publishers 1989)

there is no new thing under the sun. Is there any thing whereof it may be said, See, this is new? It hath been already of old time, which was before us. [King James Version] (1001, Ecclesiastes, I-9,10)

The Old Testament: The Authorized or King James Version of 1611
(Everyman’s Library 1996)

明治時代の日本人の見方

- 徳富蘇峰 [1863～1957]
『将来の日本』(1886)
- 中江兆民 [1847～1901]
『三酔人経綸問答』(1887)
 - 福沢諭吉 [1835-1901] 『文明論の概略』(1875) など
 - 久米邦武 [1839-1931] 『米欧回覧実記』(1878)
 - 陸奥宗光 [1844-1897] 『蹇蹇録』(1896)

腕力世界

「今日の世界は開化人が暴虐をもって野蛮人を吞滅するの世界なり。」(78)

「ビスマルクがいわゆる頼むべきは公法にあらず、ただ鮮血と黒鉄とのみなるをや。」(87)

「ああインドすでに滅び、安南また滅び、ビルマまたついで滅ぶ。…第十九世紀の今日においては八岐の大蛇はあれども素盞鳴尊はあらざるか。…シナの前途はいかん。朝鮮の前途はいかん。そもそもまたわが日本の前途はいかん。」(95)

平和世界

「欧州を支配するの勢力は実に兵と富との二大主義に帰せざるべからず。しかしていずれがもっとも重なる勢力を有するか。すなわち兵よく富を支配するか。富よく兵を支配するか。これ吾人が講究すべき問題なり。」(96)

『日本の名著40 徳富蘇峰・山路愛山』(中央公論社)

平和世界

「ただ一見せば欧州は腕力の世界なり。少しくこれを観察するときには裏面にはさらに富の世界あるを見、兵と富とは二個の大勢力にして「いわゆる日月双び懸かりて、乾坤を照らす」のありさまなるを見るべし。しかれどもさらに精密にこれを観察せば兵の太陽はその光輝燦爛たるがごとしといえども夕暉すでに斜めに西山に入らんとする絶望的のものにして、かの富の太陽は紅輪杲々としてまさに半天に躍り上らんとする希望的のものなるを見るべし。」(114)

『日本の名著40 徳富蘇峰・山路愛山』(中央公論社)

利己主義による平和

「けだし近時の世界において真正の平和主義なるものはスミス氏より出でたりといわざるべからず。…スミス氏に至りてはかの平和なるものは自家の利益を犠牲としたるの平和にあらず。自家の利益を進取せんがための平和なりと一唱したる…」(117-8)

「戦争に敵するものは平和主義にあらずしてむしろ利己主義なり」(118)

『日本の名著40 徳富蘇峰・山路愛山』(中央公論社)所収

徳富蘇峰による「世界」

- 「腕力世界」と「平和世界」の二分法
- 「腕力世界」の無法、武力中心
- 「平和世界」の根拠
- 交通・通信手段の発達、経済的相互依存の進展
- 蘇峰「予は精神的に殆ど別人となつた。而してこれと云ふも畢竟すれば、力が足らぬ故である。力が足らなければ、如何なる正義公道も、半文の価値も無いと確信するに至つた。」(310)(日清戦争)

徳富蘇峰(猪一郎)『蘇峰自伝』(中央公論社 1935)

中江兆民『三酔人経綸問答』

「南海先生、性酷だ酒を嗜み、また酷だ政事を論ずることを好む。而して其酒を飲むや、僅かに一二小瓶をのみほす時は、醺然として酔ひ、意気飄揺として大虚に游飛するが如く、目怡び、耳娛しみ、絶て世界中憂苦なる者あるを知らず。……」(121)

中江兆民『三酔人経綸問答』(岩波文庫 1965)

国境の意義（民主制）[紳士君]

「人々自ら主として別に主人なき時は、国名は唯地球の某部分を指名するに過ぎざるのみ。故に我は某国人なりと云ふは、畢竟、地球の某部分に居る者なりと云ふの意なり。我と人と、畛域有ることなし、敵讎の意を生ずることなし。」⁽¹⁴⁷⁾

中江兆民『三酔人経綸問答』（岩波文庫 1965）

国境の意義(王制)[紳士君]

「然らずして国に一人の主有るに於ては、国名は其主人の家号なり。故に我は某国人なりと云ふは、畢竟某国王の臣なりと云ふの意なり。此れ、我と人と畛域有るなり。斯に於て乎、敵讎の意生ずる有り。地球の各部位を割裂し、其居民の心をして相互に隔障せしむる者は、王制の遺禍なり。」(147-8)

中江兆民『三酔人経綸問答』(岩波文庫 1965)

攻められたらどうするのか？

「僕は断じて此の如き兇暴国有ること無きを知る。若し万分の一、此の如き兇暴国有るに於ては、吾濟各々自ら計を為さんのみ。但僕の願ふ所は、我衆一兵を持せず、一弾を帯びず、従容として曰はんのみ。吾儕未だ礼を公等に失ふこと有らず、幸い、責らるるの理有ること無し。・・・公等速に去りて国に帰れ、と。彼れ猶ほ聴かずして、銃砲を装して我に擬する時は、我衆大声して曰はんのみ、汝何ぞ無礼無義なるや、と。因て弾を受けて死せんのみ。」(163)

中江兆民『三酔人経綸問答』(岩波文庫 1965)

争いが本質[豪傑君]

「争は人の怒りなり。戦は国の怒なり。争ふこと能はざる者は懦夫なり。戦ふこと能はざる者は、弱国なり。人若し、争は悪徳なり、戦は末節なり、と曰はば、僕は対へて曰はんとす、人の現に悪徳有ることを奈何せん、国の現に末節に徇うことを奈何せん、事の実際を奈何せん、と。」(166)

中江兆民『三酔人経綸問答』(岩波文庫 1965)

武備は統計表[豪傑君]

「文明国は必ず強国なり・・・是故に武備は、各国文明の效の統計表なり。戦争は、各国文明の力の験温器なり。」(166-7)

中江兆民『三酔人経綸問答』(岩波文庫 1965)

過慮はいけない[南海先生]

(紳士君の説も豪傑君の説も)「其病源は実は一なり。一とは何ぞや。過慮なり。」(199)

「万国講和の論は未だ実行す可らずと雖も、諸国交際の間、道德の旨義は漸く其区域を広めて、腕力の旨義は漸く其封境を狭むること、是れ自然の勢にして、紳士君の所謂進化神の行路なり。」(200)

中江兆民『三酔人経綸問答』(岩波文庫 1965)

国家には制約がある[南海先生]

(現在の強国も)「四国強弱の勢大抵相当るが故に、彼れ皆已むことを得ずして、幾分か公法を守らざるを得ず。」(200) <諸国均勢>

「且邦国なる者は衆意欲の集合にして、君主有り、百僚有り、議院有り、庶民有りて、其機関極て錯雑なるが故に、其趣向を決し、其運動を起すこと、復た一個人の軽便なるが如くならず。」(201) <国内政治>

中江兆民『三酔人経綸問答』(岩波文庫 1965)

実形と虚声 [南海先生]

「大抵国と国と怨を結ぶ所以の者は、実形に在らずして虚声に在り。実形を洞察するときには少も疑いを置くに足らざるも、虚声を予測するときには頗る畏る可きを見る。故に各国の相疑うは、各国の神経病なり。青色の眼鏡を著けて物を視るときは、見る所として青色ならざるは莫し。僕常に外交家の眼鏡の無職透明ならざることを憫れむなり。」(203)

中江兆民『三酔人経綸問答』(岩波文庫 1965)

戦争への道[南海先生]

「是故に、両邦の戦端を開くは、互いに戦を好むが為めにして然るに非ずして、正に戦を畏るるが為にして然るなり。我れ彼を畏るるが故に急に兵を備ふれば、彼も亦我を畏れて急に兵を備へて、彼此の神経病、日にさかんに月に烈くして、其間又新聞紙なる者有り、各国の実形と虚声とを並挙して、区別する所無く、甚きは或は自家神経病の筆を振り、一種異様の彩色を施して、之を世上に伝播する有り。是に於て彼の相畏るる両邦の神経は益々錯乱して、以為へらく、先んずれば人を制す、寧ろ我より発するに如かず、と。是に於て彼の両邦、戦いを畏るるの念俄に其極に至りて、戦端自然に其間に開くるに至る。是れ古今万国交戦の実情なり。」(203-4)

中江兆民『三酔人経綸問答』(岩波文庫 1965)

中江兆民による「世界」

- 三分法の世界
- 紳士君の世界
 - 民主と経済相互依存による平和
- 豪傑君の世界
 - 大国同士の戦争の世界
- 南海先生の世界
 - 戦争と制度(万国公法)の交錯する相互不信の世界

腕力世界、豪傑君の源流？

「諸君も承知、われらも知っているように、この世で通ずる理屈によれば正義か否かは彼我の勢力伯仲のとき定めがつくもの。強者と弱者の間では、強きがいかに大をなし得、弱きがいかに小なる讓歩をもって脱し得るか、その可能性しか問題となり得ないのだ。」(中巻 353-4)

“you know as well as we do that right, as the world goes, is only in question between equals in power, while the strong do what they can and the weak suffer what they must.”(Book V, Ch.17, 89)

トゥーキュディデース[久保正彰訳]『戦史』(岩波文庫 1966)

Thucydides [tr. Richard Crawley]

The History of the Peloponnesian War. (Everyman's Library 1957)

正義と力

「正義を説くのもよかろう、だが力によって獲得できる獲物が現れたとき、正邪の分別にかかずらわって侵略を控える人間などあるうはずがない。」 (上巻 126)

トウーキュディデース[久保正彰訳]『戦史』(岩波文庫 1966)

愛されるより恐れられるべし

「恐れられるよりも慕われるほうがよいか、それとも逆か。人はそのいずれでもありたいと答えるであろうが、それらを併せ持つことはおよそ困難であるから、二つのうちの一つを手放さねばならないときには、慕われるよりも恐れられていたほうがはるかに安全である。なぜならば、人間というものは、一般に、恩知らずで、移り気で、空惚けたり隠し立てをしたり、危険があればさっさと逃げ出し、儲けることにかけては貪欲であるから、(中略)人間というものは、恐ろしい相手よりも、慕わしい相手のほうが危害を加えやすいのだから。なぜならば、恩愛は義務の鎖でつながれているので、邪な存在である人間は、自分の利害に反すればいつでもこれを絶ち切ってしまうが、恐怖のほうはあなたに付きまとして離れない処罰の恐ろしさによってつなぎ止められているから。」(126-7)

マキアヴェッリ[河島英昭訳]『君主論』(岩波文庫 1998)

カウティリヤのマンダラ(輪円)

「その王の周囲に、円状をなして存する、直接の隣国が『敵』[とみなされる]構成要素である。」

「同様にして、隣隣国が「友邦」という構成要素である。」

「その(敵の)前方に、友邦、敵の友邦、友邦の友邦、敵の友邦の友邦が、領土的に順次に隣接して続く。後方に、背面の敵、背面の友邦、背面の敵の友邦、背面の友邦の友邦が続く。」

「隣接国は『本来的な敵』である。」

「隣隣国は『本来的な友邦』である。」(下巻 46-7)

カウティリヤ[上村勝彦訳]『実利論—古代インドの帝王学』(岩波文庫1984)

合従[蘇秦]

「六国が合従して秦を擯斥すれば、
秦はさだめし、軍を函谷関から出して、
山東の諸侯を害しはいたします
まじ。」(2巻 156)

劉向編[常石茂訳]『戦国策』(東洋文庫 1966)

連衡[張儀]

「そもそも、合従するということは、群羊を駆つて猛虎を攻めるに異なりません。」(2卷 56)

「王さまのためにお計りいたしますに、秦にお仕えになるにしくはございません。秦にお仕えになれば、楚・韓は、うけあい、動こうとはしませんすまい」(2卷 263)

劉向編[常石茂訳]『戦国策』(東洋文庫 1966)

戦争状態はなぜ生じるか？（ホッブズ）

「能力のこの平等から、われわれの目的を達成することについての、希望の平等が生じる。したがって、もしだれかふたりが同一のものごとを意欲し、それにもかかかわらず、ふたりがともにそれを享受することができないとすると、かれらはたがいに敵となる。」(1巻 208)

ホッブズ[水田洋訳]『リヴァイアサン』(岩波文庫 1954)

相互不信の相互先制の予測

「この相互不信から自己を安全にしておくには、だれにとっても、先手をうつことほど妥当な方法はない。」(209)

「征服によって力を増大させなければ、守勢にたつだけでは、ながく生存することができないであろう。」(209)

「かれが現在もっている、よく生きるための力と手段を確保しうるためには、それ以上を獲得しなければならない」(169)

戦争状態

「人びとが、かれらすべてを威圧しておく共通の権力なしに、生活しているときには、かれらは戦争とよばれる状態にあり、そういう戦争は、各人の各人に対する戦争である」(1巻 210)

(戦争状態においては)「人間の生活は、孤独でまずしく、つらく残忍でみじかい(solitary, poore, nasty, brutish, and short)。」(1巻 211)

ホッブズ[水田洋訳]『リヴァイアサン』(岩波文庫 1954)

注意

- ホッブズの理論は、主権国家発生の理論であった。
- どこが国際関係に関連するか。
- 人々の中の戦争状態の解決が、高次の戦争状態を発生させるのではないか。同じロジックが、国家間でもおこるのではないか。

戦争状態はどこにあるか

「王たち、および主権者の権威をもった諸人格は、かれらの独立性のゆえに、たえざる嫉妬のうちであり、剣闘士の状態と姿勢にあって、たがいにかれらの武器をつきつけ、目をそそいでいる。かれらの王国の国境にあるかれらの要塞や守備兵や銃砲と、かれらの隣国に対するたえざるスパイが、そうであって、これは戦争の姿勢である。」(1巻 213)

ホッブズ[水田洋訳]『リヴァイアサン』(岩波文庫 1954)

平和世界、紳士君の源流？

- 現実の戦争の多さへの不満
- 平和の条件
- 平和のためのアイデア

王国と盗賊

「正義がなくなると、王国は大きな盗賊団以外のなにでもなかろうか。盗賊団も小さな王国以外のなにでもないのである。盗賊団も、人間の集団であり、首領の命令によって支配され、徒党をくんでではなく、団員の一致にしたがって奪略品を分配するこの盗賊団という禍いは、不逞なやからの参加によっていちじるしく増大して、領土をつくり、住居を定め、諸国を占領し、諸民族を征服するようになるとき、ますます、おおっぴらに王国の名を僭称するのである。そのような名が公然とそれに与えられるのは、その貪欲が抑制されたからではなく、懲罰をまぬがれたからである。」(1巻 273)

アウグスティヌス[服部英次郎訳]『神の国』(岩波文庫 1982-1991)

海賊とアレクサンデル大王

「ある海賊が捕らえられて、かのアレキサンデル大王にのべた答はまったく適切で真実をうがっている。すなわち、大王が海賊に、『海を荒らすのはどういうつもりか』と問うたとき、海賊はすこしも臆すところなく、『陛下が全世界を荒らすのと同じです。ただ、わたしは小さな舟でするので盗賊とよばれ、陛下は大艦隊でなさるので、皇帝とよばれるだけです』と答えたのである。」(1巻 273)

アウグスティヌス[服部英次郎訳]『神の国』(岩波文庫 1982-1991)

商業は平和につながる

モンテスキュー[1689-1755]

「商業の自然の効果は平和へと向かわせることである。一緒に商売をする二国民はたがいに相依り相助けるようになる。一方が買うことに利益をもてば、他方は売ることにも利益をもつ。そしてすべての結合は相互の必要に基づいている。」（中巻 202）

モンテスキュー[野田良之ほか訳]『法の精神』（岩波文庫 1989）

専制が戦争を生み出す

「戦争をすべきかどうかを決定するために、国民の賛同が必要となる…（中略）…場合に、国民は戦争のあらゆる苦難を自分自身に背負いこむ…（中略）…のを覚悟しなければならないから、こうした割りに合わない賭け事をはじめることによりきわめて慎重になるのは、あまりにも当然のことなのである。これに反して臣民が国民ではないような体制、つまり共和的ではない体制においては、戦争はまったく慎重さを必要としない世間事であるが、それは元首が国家の成員ではなくて、国家の所有者だからである。」(32-33)

カント [宇都宮芳明訳] 『永遠平和のために』 (岩波文庫 1985)

国と国が連合すればよい

アベ・ド・サンピエール[1658-1743]

- 集団的安全保障の考え方の萌芽
- 各君主が、ヨーロッパ全体の社会をつくるという合意をする
- 各君主は、他国に戦争をしてはならない。
- 戦争をしかけた君主は、すべての敵になる。
- 決議に従わない君主も敵になる

カントによる三つの方法

- 共和的な国内体制
- 平和連合
- 商業による平和

カント[宇都宮芳明訳]『永遠平和のために』(岩波文庫 1985)

カント[篠田英雄訳]「世界公民的見地における一般史の構想」『啓蒙とは何か 他四編』(岩波文庫 1974)所収

南海先生の源流？ロック

「それは完全に自由な状態であって、そこでは自然法の範囲内で、自らの適当と信ずるところにしたがって、自分の行動を規律し、その財産と一身とを処置することができ、他人の許可も、他人の意志に依存することもいらない」(10)

「それはまた、平等の状態でもある」(10)

「彼は自分自身の存続が危くされないかぎりできるだけ他の人間をも維持すべきであり、」(13)

「自然状態においては自然法の執行は各人の手に託されている」(13)

「確かに大きな不都合が生ずるに違いない」(19)

ロック[鵜飼信成訳]『市民政府論』(岩波文庫 1968)

永遠の友はない

パーマストン[1784-1865]

「大英帝国には永遠の敵も永遠の友もない。
存在するのは永遠の利益だけである」

トゥーキュディデース

「アテーナイ人の勢力が拡大し、ラケダイモン人に恐怖をあたえたので、やむなくラケダイモン人は開戦にふみきったのである。」 (上巻 77)

トゥーキュディデース[久保正彰訳]『戦史』(岩波文庫 1966)

世界を見る見方はこれだけか？

- 腕力世界と平和世界
- 紳士君、豪傑君、南海先生

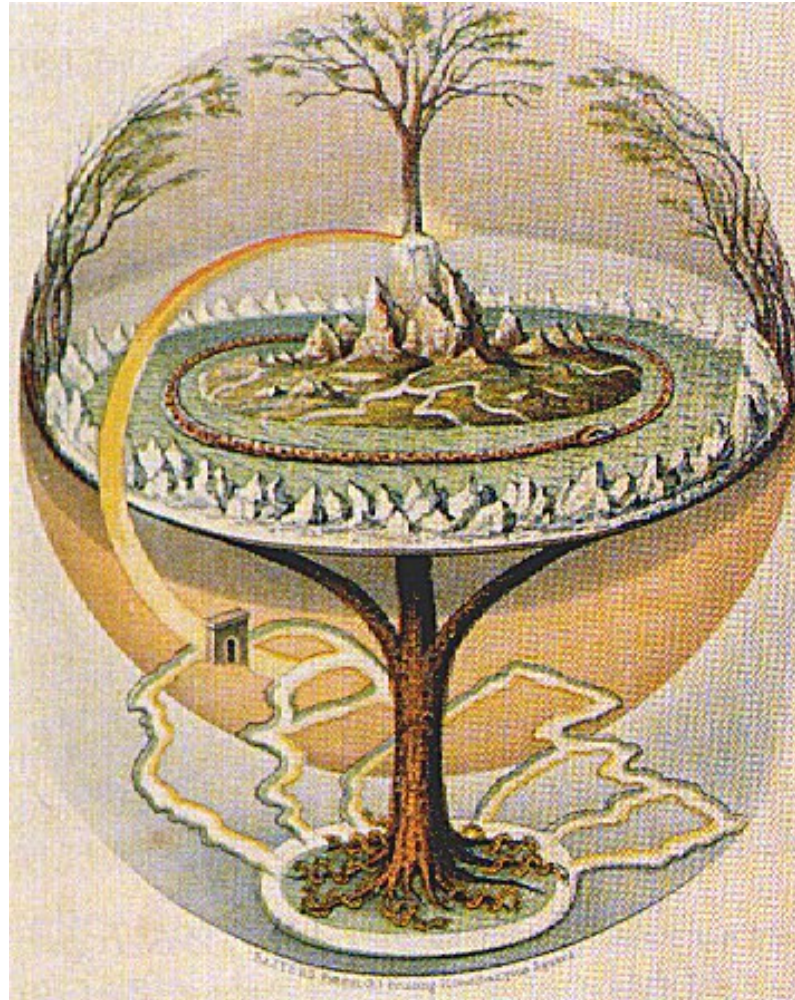
- これ以外には、世界を見る見方はないか。
- もちろん、存在する
- さまざまな世界、単一の世界、小さくなる世界

世界大相圖(仏教の見方)



† 龍谷大学図書館所蔵

北欧神話の世界



<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%BB%E5%83%8F:Yggdrasil.jpg>

平家物語における「世界」

「本朝、大宋のあひだは世のつねの渡海なれば、やすきかたも候ひなん。天竺、震旦のさかひは、流沙、葱嶺の嶮難越えがたき道なり。まづ『葱嶺』と申す山は、西北は雪山につづき、東南は海隅に聳えたり。この山をさかふ西をば『天竺』といひ、東をば『震旦』といふ。道の遠さ三万余里、草木も生ひず、水もなし。銀漢に臨んで日を暮らし、白雲を踏んで天にのぼる。かくのごとくの多くの嶮難なるなかに、ことに高く聳えたる峰あり。『刹波羅最難』と名づけたり。」

(中巻 149=巻6 祇園の女御)

平家物語(新潮社 新潮日本古典集成)

粟散辺地としての日本

「この法は釈尊の附属、波羅奈国の馬鳴比丘、南天竺の龍樹菩薩より、次第に相伝し来たれるを、今日のなさけにさづけらる。わが朝は粟散辺地の域、濁世末代といひながら、澄憲に附属して、法衣のたもとをしぼりつつ、のぼられし心のうちこそたつとけれ。」

(上巻 116頁=巻2 座主流)

平家物語(新潮社 新潮日本古典集成)

ヘロドトスによるペルシア帝国

「ペルシア人は自分自身につづいては、最も近い隣国の民族を一番尊重する。次は二番目に近いものというふうに、距離に応じて評価を下げていくのである。それで自分から最も遠くに住む民族は最も軽んずるわけで、それは彼らが自分たちは世界中でいかなる点においても格段に最優秀の民族であり、他の民族は今いったように距離に応じてその持つ長所の度合が違ってゆき、自分たちから最も離れているものは最も劣等だと考えているからである。」(上巻108)

ヘロドトス[松平千秋訳]『歴史』(岩波文庫 1971-1972)

乾隆帝からジョージ3世への書簡

- 「ああ、爾国王、遠く重洋に在り、心を傾けて化に向い、特に使を遣し、恭しく表章を齎し、海に航して来庭し、万寿を叩祝し、並びにつぶさに方物を進め、う用ってまことをいたす。」(328)
- 「天朝の徳威は遠くに被び、万国来王す。種種の貴重物、梯航してことごとく集まり、有らざるところなきは、爾の正使等の親しく見るところなり。・・・」(330)
- 「爾国王、唯だ当に善く朕の意を体し、ますます款誠を励み、永く恭順をちかい、もってなんじの有邦をやすんじおさめ、共に太平の福を享くべし。」(330)

マカートニー[坂野正高訳]『中国訪問使節日記』(東洋文庫 1975)
(部分的に漢字をかなに変換してあります)

世界観のタイポロジー

- さまざまな世界(三千世界、9世界…)
- 階層的(同心円的)世界
- 主体並立型世界
 - 豪傑君的解釈(腕力世界)
 - 紳士君的解釈(平和世界の望ましさと可能性)
 - 南海先生的解釈(国際社会の現実の重視)

小さくなる地球

「かつては広がったですって。地球が小さくなったとでもおっしゃるのですか。」

「もしかしたらその通りですよ。」(中略)「私はフォッグ氏と同意見だ。地球は小さくなった。いまや、100年前の10倍以上の速さで、地球を一周することができるのです。」(31)

ジュール・ヴェルヌ[鈴木啓二訳]『八十日間世界一周』(岩波文庫 2001)

世界市民としての資本家

「資本の所有者は、まさしく世界市民なのであって、かならずしも、ある特定の一国にしがみついてはいない。かれは、背負いきれないような重税をかけられるためにやっかいな取調べにさらされる国を捨てて、ほかへ行こうと思いがちであり、もっと気楽に事業を営むなり財産を享受するなりできるような、どこかほかの国へ資本を移動させるだろう。」(3巻260)

アダム・スミス[大河内一男監訳]『国富論』(中公文庫 1978)

一体化する世界(1)

「遠い昔からの民族的な産業は破壊されてしまい、またなおも毎日破壊されている。これを押しよけるものはあたらしい産業であり、それを採用するかどうかはすべての文明国民の死活課題となる。しかもそれはもはや国内の原料ではなく、もっとも遠く離れた地帯から出る原料にも加工する産業であり、そしてまたその産業の製品は、国内自身において消費されるばかりでなく、同時にあらゆる大陸においても消費されるのである。」(44)

マルクス・エンゲルス[大内兵衛ほか訳]『共産党宣言』(岩波文庫 1951)

一体化する世界(2)

「国内の生産物で満足していた昔の欲望の代りに、あたらしい欲望があらわれる。このあたらしい欲望を満足させるためには、もっとも遠く離れた国や気候の生産物が必要となる。昔は地方的、民族的に自足し、まとまっていたのに対して、それに代ってあらゆる方面との交易、民族相互のあらゆる面にわたる依存関係があらわれる。物質的生産におけると同じことが、精神的な生産にも起る。個々の国々の精神的な生産物は共有財産となる。民族的一面性や偏狭は、ますます不可能となり、多数の民族のおよび地方的文学から、一つの世界文学が形成される。」(44)

マルクス・エンゲルス[大内兵衛ほか訳]『共産党宣言』(岩波文庫 1951)

無能な魔法使い？

「かくも巨大な生産手段や交通手段を魔法で呼び出した近代ブルジョア社会は、自分が呼び出した地下の悪魔をもう使いこなせなくなった魔法使に似ている。」(46)

「共産主義者は、プロレタリアの種々な国民的闘争において、国籍とは無関係な、共通の、プロレタリア階級全体の利益を強調し、それを貫徹する。」(57)

マルクス・エンゲルス[大内兵衛ほか訳]『共産党宣言』(岩波文庫 1951)

日の下に新しいものはない？

- 隔絶した世界、宗教的、神話的世界観は過去のもの
- 朝貢体制的世界観も過去のもの？
- 紳士君、豪傑君、南海先生の見方はどうか。彼らの現代の後継者は誰か。
- 一体化する世界は、紳士君の見方、平和世界の見方と同じか？